Memoirs of Beppu University, 52 (2011)

Moodle を活用した ブレンディッドラーニングモデルの構築とその有効性
－上級日本語文法を中心に－

篠　﨑　大　司

【要　　旨】

本稿は、ブレンディッドラーニング授業モデル構築の一環として、留学生を対象にした上級日本語文法 e コンテンツを開発するとともに、その授業実践で得た学習者による授業評価の結果から、その有効性について検証するものである。

アンケート調査の結果、コンテンツ内容を含んだ本モデルに関する質問のうち、18項目中17項目において、80％以上の学習者が肯定的に評価し、本モデルが日本語教育における言語知識育成教育においても、満足度の高い授業を提供しうるものであることが明らかになった。

【キーワード】

ブレンディッドラーニング　e ラーニング　上級日本語　文法教育
日本語能力試験Ｎ１

１．はじめに

本稿は、ブレンディッドラーニング（以下、BL）モデルの構築に向け、留学生を対象にした上級レベルの日本語文法 e ラーニングコンテンツを構築するとともに、その実践によって得られた学習者による授業評価の結果から、その有効性を検証しようとするものである。

BL とは、e ラーニングによるオンライン教育と従来の対面式授業に代表されるオフライン教育を融合した授業モデルである。オンライン教育とオフライン教育双方のメリットを活かしつつ同時にデメリットを補完できる新たな授業モデルとして、近年注目されている。

筆者もこれまで上級レベルの日本語読解 e ラーニングコンテンツおよび聴解 e ラーニングコンテンツの開発と授業実践を通して、言語技能の育成に対する BL の有効性を検証してきた（篠﨑（2009）、篠﨑（2010））。本稿では、従来と同様 Moodle を LMS の基盤として、さらに上級日本語文法 e コンテンツを開発、授業実践で得た学習者による授業評価の結果から、その有効性について検証する。

２．先行研究

BL は、従来の対面式授業あるいは通信教育を主としたｅラーニング教育の次を担う新たな授業モデルとして注目されており、企業における社員研修や大学等での情報教育および医療分野を中心に実践報告がなされている（例えば、ジョシュ・バーシン（2006）、中尾他（2005））。

一方、日本語教育の分野においても、近年 BL に対する関心がにわかに高まっており、徐々にではあるが実践報告もなされてきた。

藤本（2008）は、初級日本語学習者を対象とした BL による遠隔教育（台湾－東京）授業を実践し、利用上の問題点と課題を報告している。また、池田（2010）は、同じく初級日本語学習者を対象とした BL による授業を実践し、開発したｅコンテンツの使用状況と実際の学習者の日本語学習との関連性について検証している。ただし、両者とも BL を普遍性の高い授業モデルとしていかに標準化していくべきかについては、言及されていない。

篠﨑（2009）では、上級日本語学習者を対象に BL による日本語能力試験Ｎ１対策としての読解授業を実践、学習者による授業評価によってその有効性を検証している。ここでは、BL をｅラーニングによるオンライン部門と生身の教師によるオフライン部門に分け、それぞれの役割分担を明確化することで授業モデルの標準化を試みた。篠﨑（2010）では、標準化されたモデルをさらに上級日本語学習者に対する聴解教育に準用し、学習者評価によってその有効性を検証した。さらに、篠﨑（2011）では特にオフライン部門に注目し、学習者の学習意欲の向上に生身の教師がいかに関与できるかについて授業実践を行い、その教育効果を検証している。

３．本研究の目的

BL モデルの構築に向け、以下の２点を本研究の目的とする。

⑴　篠﨑（2009）、篠﨑（2010）で構築した BL モデルを踏まえ、その枠組みに検討を加えた上で、それに基づいた上級日本語文法育成のためのｅラーニングコンテンツを開発する。

⑵　開発したコンテンツを使って BL による文法授業を実施、学習者評価によってその有効性を検証するとともに今後の課題を明らかにする。

４．BL モデルの枠組み

４－１．BL モデルの枠組み

BL モデルにおいては、そのコースの趣旨や目標に合わせて、オンライン部門とオフライン部門が授業の中でうまく連動するよう、予めその役割分担をデザインしておく必要がある。本稿では、オンラインに任せられる部分は極力それに委ね、生身の教師にしかできない部分に教師は注力

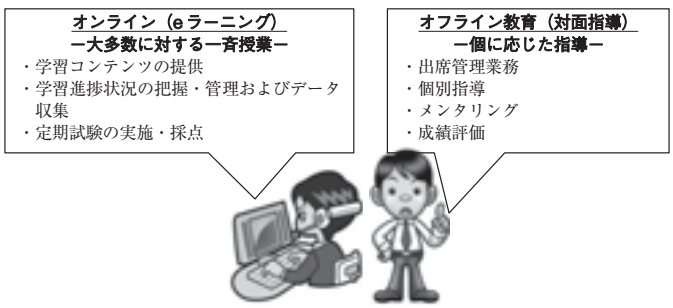

図１　BL 授業モデルの枠組み

することを基本方針に、その枠組みを以下のように定める。

⑴　オンライン教育（e ラーニング）：学習コンテンツの提供、学習進捗状況の把握・管理およびデータ収集、定期試験の実施・採点

⑵　オフライン教育（教師）：出席管理業務、個別指導、メンタリング、成績評価。

４－2. BL モデルのメリット

上記の枠組みに沿って BL モデルを運営することから得られるメリットをあげると、以下のようになる。

⑴　e ラーニングによる一斉プログラム指導と、教員によるオンデマンドな個別指導が両立でき、学習者満足度の高い授業が展開できる。

⑵　教師１名に対し１クラス50人以上という費用対効果・経済効率の高いクラス運営が可能である。

⑶　従来のオンライン教育の問題点であった学習者の高いドロップアウト率を最小限に食い止めることができる。

⑷　授業準備や教師の一斉授業、定期試験の作成採点の必要がなく、教師の授業負担を大幅に軽減することができる。

⑸　問題の難易度や学習者一人一人の詳細な学習進捗データが把握できるため、より細かな個別指導やコース内容の問題点の把握が可能である。

⑹　メールマガジンや動画サイトなど各種 IT メディアと連動した、魅力あふれる授業展開が可能である。

５．コース概要

コースの概要は以下のとおりである。

⑴　対象：日本語能力試験２級程度の留学生

⑵　目標：日本語能力試験Ｎ１程度の文法力の養成

⑶　授業：PC 教室による一斉授業。１コマ90分×16コマ（期末試験含む）。

⑷　シラバス：平成13年（一部）から平成19年までの日本語能力試験１・２級の過去問題（注１）にオリジナルコンテンツを追加し構成している（図２参照）。

⑸　コンテンツ概要
コンテンツは学習者にとって必須タスクであるメインコンテンツとメインコンテンツ終了後任意にアクセスできるサブコンテンツからなる。

メインコンテンツでは、日本語能力試験Ｎ１レベルの文法力の育成を目的としている。課の構成は①前回の復習（15題）、②２級過去問題（15～20題）、③１級過去問題（15～20題）、④１級過去問題映像解説（平均約38分）、⑤１級オリジナル問題（８～９題）、⑥文の組み立て問題（５題）、⑦復習問題（15題）となっており、前のタスクが一定の条件のもとで終了しないと次のタスクに進

第１回	オリエンテーション
	平成13年度２級（抜粋）
	平成13年度１級（抜粋）
第２回	平成14年度２級　問題Ⅳ
	平成14年度１級　問題Ⅳ
第３回	平成14年度２級　問題Ⅴ・Ⅵ
	平成14年度１級　問題Ⅴ・Ⅵ
第４回	平成15年度２級　問題Ⅳ
	平成15年度１級　問題Ⅳ
第５回	平成15年度２級　問題Ⅴ・Ⅵ
	平成15年度１級　問題Ⅴ・Ⅵ
第６回	平成16年度２級　問題Ⅳ
	平成16年度１級　問題Ⅳ
第７回	平成16年度２級　問題Ⅴ・Ⅵ
	平成16年度１級　問題Ⅴ・Ⅵ
中間試験	
第８回	平成17年度２級　問題Ⅳ
	平成17年度１級　問題Ⅳ
第９回	平成17年度２級　問題Ⅴ・Ⅵ
	平成17年度１級　問題Ⅴ・Ⅵ
第10回	平成18年度２級　問題Ⅳ
	平成18年度１級　問題Ⅳ
第11回	平成18年度２級　問題Ⅴ・Ⅵ
	平成18年度１級　問題Ⅴ・Ⅵ
第12回	平成19年度２級　問題Ⅳ
	平成19年度１級　問題Ⅳ
第13回	平成19年度２級　問題Ⅴ・Ⅵ
	平成19年度１級　問題Ⅴ・Ⅵ
模擬試験	
期末試験	

図２　シラバス

めないように制限した単線型コンテンツである。

サブコンテンツでは、メインコンテンツによる学習の側面サポートを目的に、メールマガジンや動画サイト、一般サイトといった各種メディアと連動したメディアリッチなコンテンツを提供することで、より広がりのある学習環境を学習者に提供する。

以下、各コンテンツについて詳述する。

６．オンライン部門（e コンテンツ）

６．１．メインコンテンツ

⑴　前回の復習（15題）

前回の復習問題と同じ問題を再度解くことにより、知識の定着を図る。正解率が80％を超えると次のタスクに進むことができる。

⑵　２級過去問題（15～20題）

図３のような画面で問題を解く。不正解の場合、選んだ選択肢の文型の説明が表示され（図４参照）、再度同じ問題が表示される。正解すればその選択肢の文型の説明が表示され、次の問題

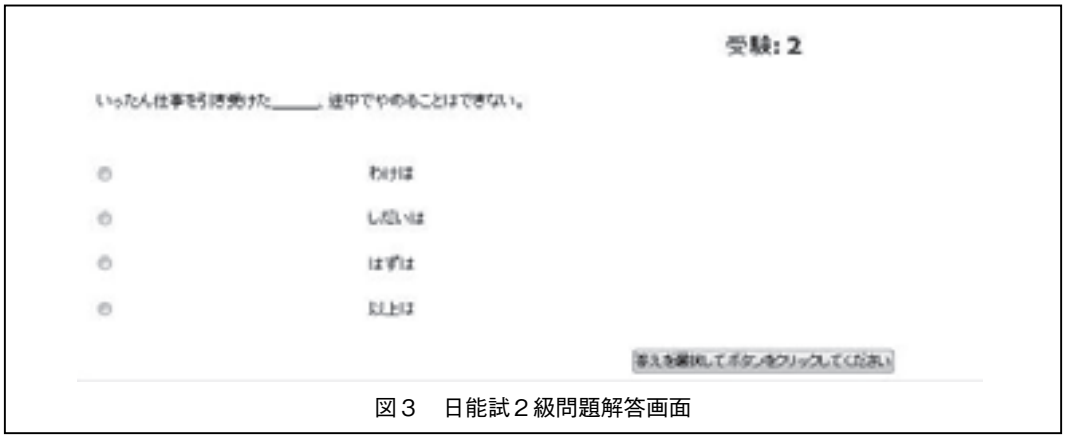

図３　日能試２級問題解答画面

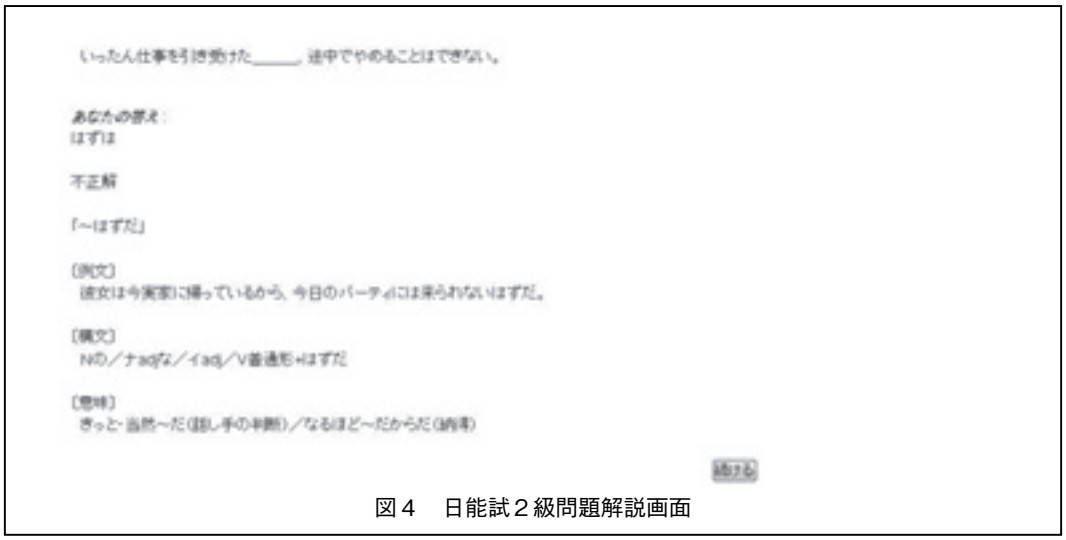

図４　日能試２級問題解説画面

に進むことができる。全問正解すると次のコンテンツに進むことができる。

⑶　１級過去問題（15～20題）

先の２級過去問題と同形式の選択問題が表示される。２級過去問題と異なる点は、解答しても正解・不正解および文型解説は表示されず、直ちに次の問題が表示され、全問題解答後に正答率のみが表示される点である。これにより指導前の学力を把握することができるとともに、学習者に「詳しく答え合わせがしたい。」「N１文型の詳しい解説が欲しい。」という欲求を起こさせることによって、次の解説動画コンテンツへの動機付けを高めることができる。

⑷　１級過去問題映像解説（平均約38分）

⑶で解いた文法問題の正解や文法の詳しい説明について動画で解説する（図５参照）。動画の不視聴や不正視聴を防ぐため、規定時間以上連続視聴し、かつ動画の内容に関する質問（四肢選択）に正解しなければ次のコンテンツに進めないよう、アクセス制限をかけている。

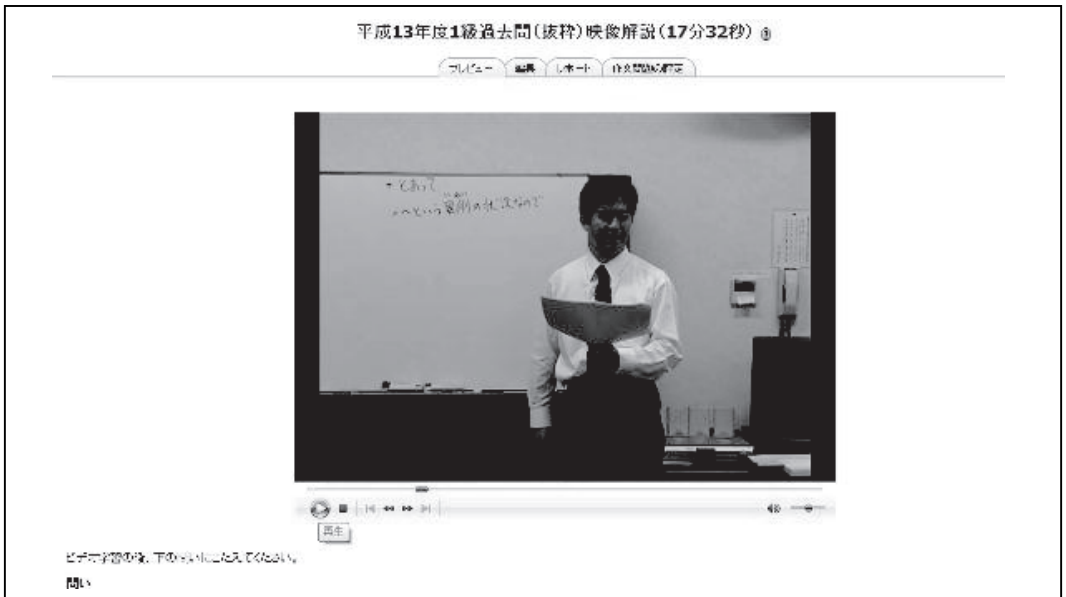

図５　１級過去問題映像解説画面

⑸　１級オリジナル問題（８～９題）

国際交流基金・日本国際教育支援協会（2007）にリストアップされている日本語能力試験１級文型および敬語表現計108項目を四肢選択で問題化したもの。正解するまで同じ問題が表示され、全問正解すると次のコンテンツに進むことができる。

⑹　文の組み立て問題（５題）

2010年度から実施される新しい日本語能力試験にあわせて作成したオリジナル問題。（５）と同様、正解するまで同じ問題が表示される。全問正解すると次のコンテンツに進むことができる。

⑺　復習問題（15題）

その課で学習した上記⑵⑶⑸の中から出題。特に⑶については、2009年度後期受講生のデータから正答率の低かった問題７題を選んで出題してある。

⑻　定期試験

中間試験と期末試験。試験範囲（中間試験では第１回～第７回，期末試験は第８回～第13回）

の中から150題ずつ，制限時間60分で実施（図６参照）。

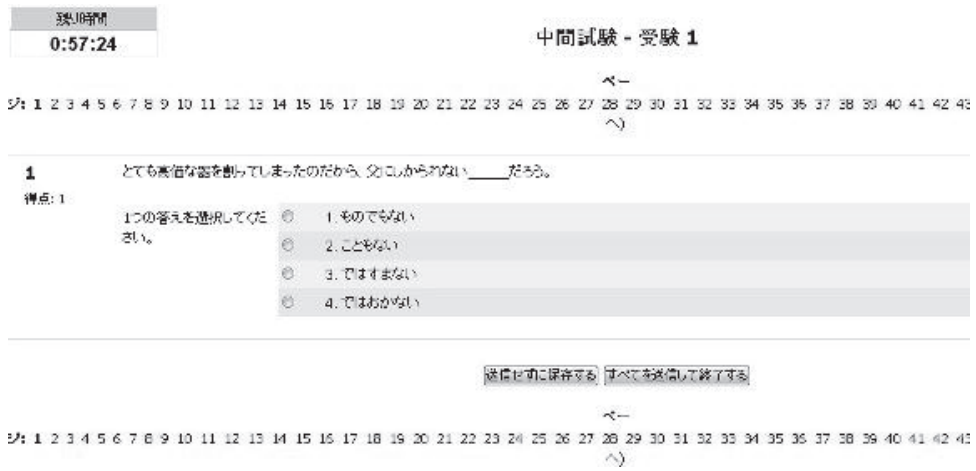

図６　定期試験画面

６－2. サブコンテンツ

サブコンテンツでは、他のITメディアを授業に取り入れることにより、メディアリッチな学習環境を学習者に提供し、より広がりのある授業を展開することで、日本語に対する知的好奇心を促す。

⑴　事例１「日本語能力試験Ｎ１対策文法」－メルマガとのコラボレーション

筆者は、本コンテンツで使用しているオリジナル問題の一部を、配信スタンドを通じてメールマガジンで週３回配信している。

「日本語能力試験Ｎ１対策文法」http://archive.mag2. com／0000257576／index.html

学習者には、極力携帯電話のメールアドレスを登録するよう促している。これにより場所を問わず24時間体制で文法学習ができる環境を提供している。

⑵　事例２「文型が絶対覚えられる珠玉の動画集」－動画サイトとのコラボレーション

上級文型をただ文字情報だけで解説するのではなく、文型と関連づけた動画とセットで学習者に提供することにより、よりインパクトのある文型導入を実現し、記憶の定着を促す。

⑶　事例３「ほめられサロン」－サイトとのコラボレーション

学習者の中には、極端に文法の苦手なものも少なくない。そうした学習者の場合、なかなかタスクをこなせないために学習意欲の減退や意欲喪失に陥る可能性が予想される。

そこで、授業の中盤で下記のようなサイトを紹介し、授業に笑いの要素を取り入れリフレッシュを図ることによって、学習意欲の減退や喪失の防止を図る。

「ほめられサロン」http://homeraresalon.com/

７．オフライン部門（対面指導）

７－１．出席管理

ポイント制による出席管理および出席状況を公開することによって、ドロップアウト率を引き下げるとともに、学習ノルマを出席に連動させることによって、授業中の単位時間当たりの学習

密度を引き上げる。（詳細は篠﨑（2009）を参照。）

７－２．個別指導

机間巡視やアドバイスメールによる個別指導を通じてオンライン指導の漏れをカバーすることにより、学習効率および学習満足度を引き上げる。

７－３．メンタリング

授業中盤に行う学習意欲の向上を目指したプレゼンテーション（篠﨑（2011））、口頭やメールによるアドバイスといったメンタリングを行うことにより、学習者を精神面でサポートしながら学習方法・学習に対する心構えを教育、学習意欲の引き上げと維持を図る。

８．授業実施と有効性の検証

８－１．授業実施

以下の要領で授業を実施した(図７参照)。

(1) 期間：2010年度前期（４月14日～８月４日）90分／コマ。全16コマ（期末試験含む)。
(2) 学習者：60名（４月14日現在。うち，中国48名，韓国９名，台湾２名，スリランカ１名)。
(3) 学習者の日本語レベル：日能試２級程度
(4) 授業形態：PC 教室での一斉授業。

図７　授業風景

８－２．学習者による授業評価と考察

コースが概ね終了した時点で、学習者による授業評価アンケート（質問23項目、５段階評価）を実施した。(N＝54)

まず、質問項目１－１～１－３は学習者自身に対するものである（図８参照)。１－１の「強くそう思う」「そう思う」の合計が51（94.4％）と極めて高い数値を示しているのは、出席をポイント制にすることで常に出席率を意識させたことが奏功したからと思われる。また、１－３の「強くそう思う」「そう思う」の合計も47（87.0％）と高い数値を示しており、学習者が本授業に積極的に取り組んだ様子がうかがえる。

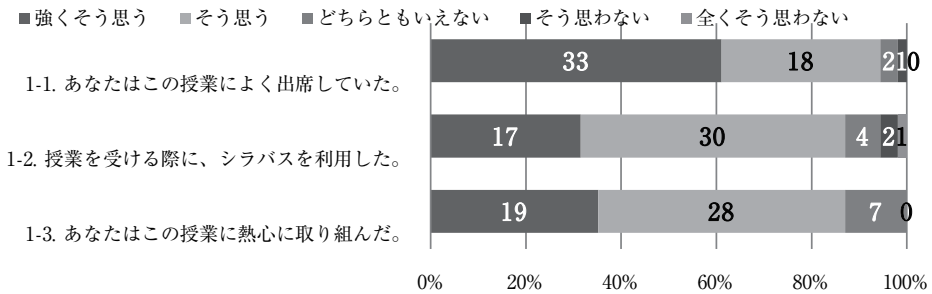

図８　アンケート「あなた自身について」

質問項目２－１～２－10は、この授業に対するものである（図９参照）。

２－１では48人（88.9％）が先と同様、肯定的であった。篠﨑（2009）、篠﨑（2010）の反省から、シラバスに関する情報をｅラーニングサイトのトップページに配したことによると思われる。

２－２では52人（96.3％）が肯定的であった。１コマ分のコンテンツ量が学習者にとって無理のない量だったということになるが、授業を観察してみると授業終了より15分～20分早くノルマを完了する学生も少なくなく、現状ではさらにコンテンツを追加する余地があることが確認された。実際、本稿で開発したコンテンツには2010年から実施される新しい日本語能力試験に導入される「文章の文法問題」は組み込まれていない。この点については今後の課題としたい。

オフライン部門に対する評価である質問項目２－５、２－６、２－８も、それぞれ51名（94.4％）、49名（90.7％）、49名（90.7％）が肯定的に評価しており、高い水準で成果を得ることができた。

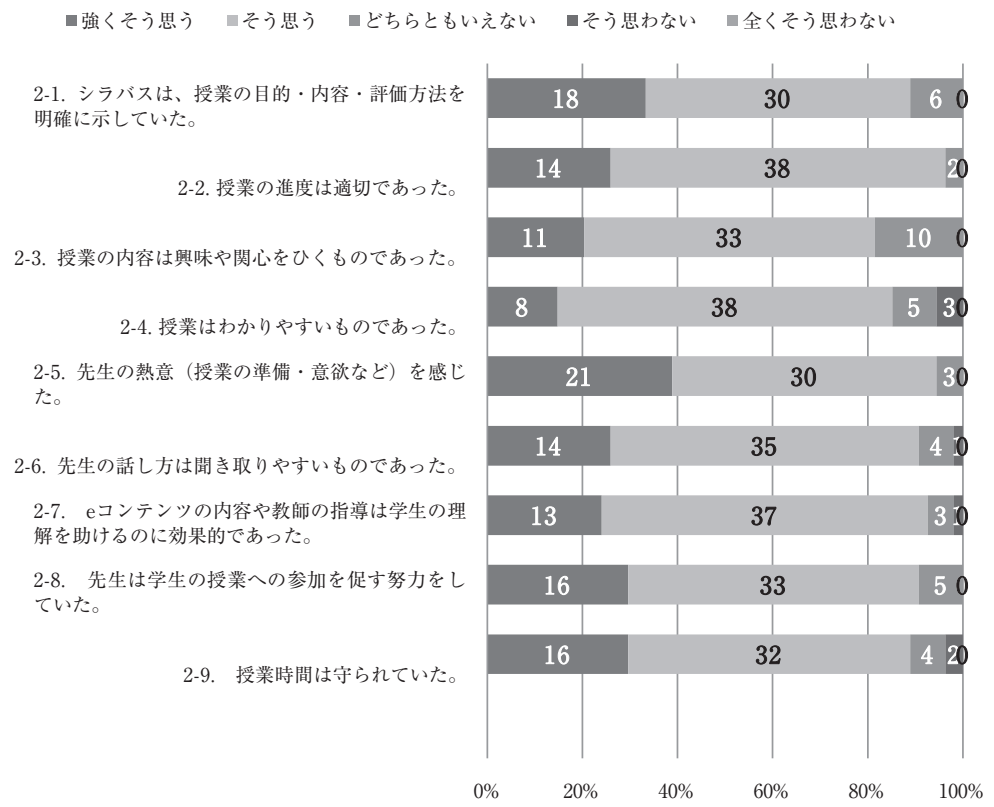

図９　アンケート「この授業について」

最後に質問項目３－１～３－９は、オンライン部門における各コンテンツに対するものである（図10参照）。ほとんどの項目において80％以上の学習者が肯定的にとらえていることから、学習者のニーズに十分こたえたコンテンツであったと判断できる。

質問項目３－２で若干低い評価が出ている理由としては、教師の指導を受けることなくいきなり自力で解答することに意義を見出せなかった、あるいは実力以上の問題を解かされることに抵

抗感を抱いたからであろうと考えられる。この点については、今後の課題としたい。

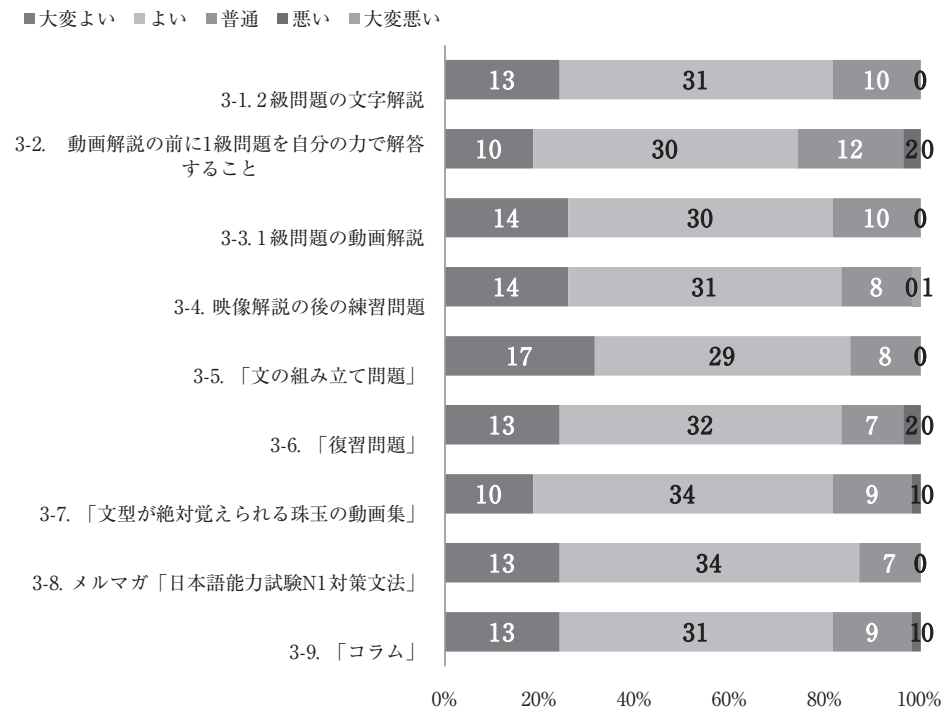

図10　アンケート「各コンテンツについて」

９．おわりに

今回のコンテンツ開発と授業実践およびアンケート調査から、上級日本語文法という言語知識教育を主体とした授業において、オンライン部門とオフライン部門を軸にしたBLモデルの有効性が示された。また、こうした授業は単調な暗記活動に終始しないよう、単調さを感じさせないコンテンツ構成や、生身の教師によるメンタリングが授業運営において非常に重要な要素であることも確認された。

実際、学習者は90分の授業の中で約80問の文法問題を自分のペースで解く。これは、従来の教師主導型の対面式授業に比べ格段に多い問題量だと思われる。しかしながら、問題量が多すぎるというクレームは、コースを通して一度もなかった。そればかりか、「日本語能力試験NI合格という目標の達成のために必要な問題量である。」「自分から主体的に学習しなければ、自分の授業は前に進まず成果も出ない。」ということを学習者は本授業のシステムから自然と学び、自律的に学習を進めている様子が観察された。また、Moodle上で行った定期試験では、制限時間60分で150問というかなりのボリュームでありながら、多くの学習者は40分程度で解答を完了し、早い学習者になると約18分で満点を取る者もいた。これらの状況を目の当たりするにつけ、BLモデルが学習者の学力や学習力を最大限に引き出す、極めて有効なモデルであると感じる。

最後に、今後の課題を２点述べる。１点目は、さらなるオン・オフ含んだコンテンツの充実および改良である。現状では、まだコンテンツを追加する余地がある。また、教師の役割も検討の余地は多い。２点目は教育効果の測定である。効果測定を実施することでその有効性も検証す

る。

以上を今後の課題としながら、BL モデルのさらなる実践研究を進めていきたい。

注

(1) 過去問題の使用について、日本国際教育支援協会、国際交流基金、凡人社より許諾を得ている。

付記

本研究は、平成22 - 24年度科学研究補助金研究「日本語上級聴解 e ラーニングコンテンツの開発およびブレンディッド型授業モデルの構築」（基盤研究（C）、課題番号22520546、研究代表：篠﨑大司）の一環として行われたものであり、2010年度日本語教育学会で行った口頭発表（デモンストレーション））をもとにしている。なお、日本語能力試験問題の使用許諾をいただいた日本国際教育支援協会および凡人社、さらにコンテンツ開発に尽力して下さった太田由紀子先生、工藤美佳先生、本田光知子先生、百合玲子先生に深謝する。

引用文献・参考文献一覧

池田伸子（2010）「ブレンディッドラーニング環境における e ラーニングシステム利用の効果に関する研究」『ことば・文化・コミュニケーション』２　pp. 1－12

国際交流基金・日本国際教育支援協会（2007）『日本語能力試験出題基準』凡人社

国際交流基金・日本国際教育支援協会（2009）『新しい「日本語能力試験」ガイドブック概要版と問題例集Ｎ１、Ｎ２、Ｎ３編』凡人社

篠﨑大司（2009）「Moodle を活用した上級日本語読解 e ラーニングコンテンツの開発と学習者評価－ブレンディッドラーニングモデルの構築に向けて－」『別府大学国語国文学』51号　pp. 1－26

篠﨑大司（2010）「Moodle を活用した上級日本語聴解 e ラーニングコンテンツの開発と学習者評価－ブレンディッドラーニングモデルの構築に向けて－」『別府大学紀要』第51号　pp. 21－34

篠﨑大司（2011）「学習意欲の向上を目指した先行事例の事前提示とその教育効果－ブレンディッドラーニングにおけるオフライン教育の充実に向けて－」『別府大学日本語教育研究』創刊号（印刷中）

ジョシュ・バーシン（2006）『ブレンディッドラーニングの戦略』東京電機大学出版局

中尾茂子・安達一寿・北原俊一・新行内康慈・井口磯夫・綿井雅康・橋本健志（2005）「ブレンディング型授業形態の類型による教材開発と授業実践」『日本教育情報学会年会論文集』21　pp. 260－263

藤本かおる（2008）「ブレンディッドラーニングによる遠隔日本語教育の実施と検証」『日本教育工学会研究報告集』08（１）　pp. 21－26